

発行日 2010.11.21

編集発行人 重富克彦

時は縮まっている。

1Cor7:21

# Kairos

事務所所在地 064-0912 札幌市中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516

## 約束に生きる

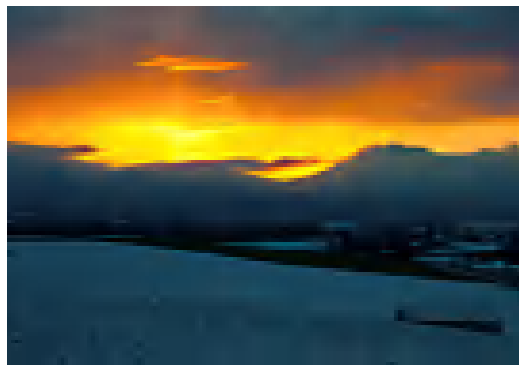
にのように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」すべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は、我々と共におられる」という意味である。）

マタイによる福音書 1:20~23

ヨセフが聖書に登場するのは、主イエスの誕生の場面と少年の頃の記事のみです。聖書に残されている僅かな情報によって、彼がユダヤの成人男子で大工の職を持ち、正しい人であった、という事を私たちは知っています。彼は婚約中のマリアの妊娠が明らかになった時、ひそかに別れようと決意しますが、天使のお告げによって考えを変えました。なかなか難しい決断であったことは想像に難くありません。自分の決断どおりに、マリアとの婚約を破棄し、別の女性とのちがう未来を切り開くことも考えられたことでしょう。けれども彼は、天

使の言葉をしっかりと受け止め、マリアとその胎に宿った新しい命を引き受ける決心をしました。ここに信仰を与えられ約束に生きる人の決断のあり方を見ることが出来ます。

教会の暦の中で、いちばん有名なのが降誕祭(クリスマス)だと思われま。日本のように、様々な宗教が混在している社会でも認知度は高く、年中行事に数えられているような所もあります。しかし、キリスト教の歴史の中で、復活祭(イースター)や聖霊降臨祭(ペ



ンテコステ)が、キリスト教会の成立と共に重要視され、福音書や使徒言行録にあるようにはじめから祝われているのに対し、降誕祭が祝われるようになったのは、かなり後年になってからです。

紀元4世紀くらいまでの教会は、キリストの再臨が間近に迫っているという緊張の中にありましたから、現在と未

来についての関心はあったものの、過去についてはあまり関心を持っていなかったようです。しかしながら、再臨の日は遠く、迫害の時代も終わり、教会組織も確立されていくようになってきて、思想が形づくられるようになると、神学的な関心で過去にも目が向けられるようになりました。

待降節(アドベント)も、降誕祭が祝われるようになってからの設定です。意義付けや守り方については教会ごとに差がありますが、キリストの降誕によって“神の真理の光がこの暗闇の世界に輝きだした”ことを待ち望み、待望する、心備えの時として大切に過ごします。そして、キリストの降誕という歴史的な事実を記念するだけでなく、神の国、神の支配がやがて世界にもたらされるという、希望にも満ちています。未来に向かって開かれた、私たちの信仰の姿勢を示しているのです。

今年も私たちはアドベントを迎えますが、どのような気持ちで過ごしているのでしょうか。主の再臨に対する期待、神の約束に対する信頼に私たちは生きていますでしょうか。世界ではじめのクリスマスを迎える前に、自らの決断ではなく神への信頼を優先し、約束に生きたヨセフを通して、私たちはキリスト者としてのあり方を教えられているように思います。(K. Okada)

# 教会の活動

## 2010 アドベント・コンサート 讃美せよ ハレルヤ

### 新札幌礼拝堂

11.28 午後2時より  
NBSCによるゴスペル

新札幌礼拝堂では、アドベント第1主日11月28日午後2時より、恒例のアドベントコンサートが開催される。今年は、北星大学のNSBC(North Star Bible Club)のメンバーによるゴスペルコーラスだ。

NSBCは、聖書に親しむと同時に、ゴスペルソングを歌うことを目的に結成されたグループで、週2回の例会のほか、老人ホームや、教会での、音楽による奉仕を展開して喜ばれている。

出演メンバーは、男女混声で、ピアノ1名、ソプラノ4名、メゾソプラノ5名、アルト3名の13名。前評判では、ボーイソプラノに、ひときわ美しい声の持主がいるという。

ゴスペルソングは、黒人霊歌に起源を持つ魂の歌だ。日本では、魂が置去りにされて、歌の響きだけが愛されている傾向があるが、ぜひ魂のこもった歌を聴かせていただきたい。

### 札幌北礼拝堂

12.23 午後2時より  
札幌シンフォニエッタ

札幌北礼拝堂でのアドベントコンサートは、12月23日午後2時より、室内管弦楽団札幌シンフォニエッタを招いて行われる。札幌シンフォニエッタは、管弦楽を愛する有志の集りによって結成されたハイアマチュアのグループで、札幌北礼拝堂を会場として、定期的な練習を積んでいてレベルも高い。札幌北礼拝堂や恵み野教会の要請に応じて、これまでも何度もコンサートを行っている。

23日は、午後1時より、教会のキャンドルサービスも予定されていて、その後すぐに、コンサートの開催ということになる



## クリスマスの計画

### 札幌礼拝堂

- 12月23日(木)午後1時半より
  - ・教会学校クリスマス
- 12月19日(日)午前10時半より
  - ・クリスマス記念礼拝
  - ・祝会
- 記念礼拝の中で、上田幸子姉の洗礼式が行われる。
- 12月24日(金)午後7時より
  - ・キャンドルサービス

### 札幌北礼拝堂

- 12月18日(土)午前10時半
  - ・クリスマス記念礼拝・祝会
- 12月23日(木)午後1時
  - ・キャンドル・サービス
  - ・2時よりコンサート
- 12月25日(土)午後2時
  - ・町内会との合同クリスマス。

### 新札幌礼拝堂

- 12月19日(日)
  - ・クリスマス記念礼拝・祝会
- 12月24日(金)午後6時半
  - ・キャンドル・サービス
  - ・クリスマス・キャロル

## めばえ幼稚園

### アドベント

ホールにはいると、子どもたちの手作りのクリスマス・カードや、クリスマス・リースが並べられている。クリスマス・リースは、まだ作製途上だが、素材は、様々な形の pasta だ。

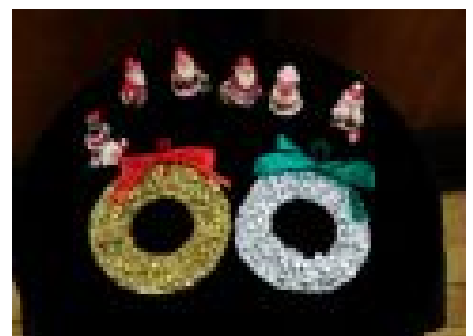
これを見ると子どもたちは、天才的な芸術家なのだあらためて思う。パ

スタの様々な形が、子どもたちの想像力を刺激し、多様な模様のクリスマス・リースが作られている。レンコン状の穴を、パターンの的に配置した、幾何学模様のリースもある。

ページェントの練習も、本格的になってきた。

第1回の家族クリスマスは12月12日(日)午後。おもに、お父さんたちと共に。第2回の家族クリスマスは12月

15日(水)。お母さんや、みんなで。



出番を待つ金銀のリース

## 連続と不連続

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

詩編23:1

最近メディアで見かけなくなったが、しばらく前まで「霊界」について饒舌だった丹波哲郎氏が、「人間生き通し」という言葉を使っていたことを記憶している。「生き通し」というのは、この世でもあの世でも、そのまんまという意味である。彼が強調しているのは、生と死の連続性だ。

彼は独特の死生観の持主のように振舞っていたし、他からもそう見られているようだ。けれど生と死を連続的に捕えるのは、きわめて日本的な心性である。それは日本人の死生観の深層をなすものと言える。その国やその民族の文化というのは、死生観と密接な関係をなしているが、加藤周一氏は、その日本文化について「死の残酷で劇的な非日常を、強調しなかった文化」と言っている。

死が断絶ではなく、日常の連続性の線上にあるという感覚である。それは、仏教的な輪廻の意識から来るよりも、更に深いところに発しているものだろう。戦争中、空の彼方に消えて行く特攻隊の若者たちは、「靖国で会おう」と言葉を交して、片道切符の飛行機に乗込んでいったという。「靖国で会おう」、これは典型的に、連続性の感覚を表現している。

この世の命は、はかないものだけれども、御霊は、生き通す。はかなさと、連続性。いみじくも特攻隊は、「花と散り」「靖国で会おう」、という言葉で、日本人の死生観の真髄を表現したとも言える。空の彼方に消えて行くのも、宇宙の中にとけ込んで行くというこれもまた古来からの日本人の心に適う。

著名人の辞世の句を少しまとめて読んでいて、大石内蔵助の辞世の句が目に入った。和歌としての優劣は

よく分らないが、武士道に則って復讐を成し遂げた侍の、死に向う心の内はよくわかる。彼はふたつの歌を残している。

あら楽し思ひは晴るる身は捨つる浮世の月にかかる雲なし。

大事を成し遂げた者の、晴々とした気持が伝わってくる。さらにもうひとつ。「あら楽し」というのが、印象的である。さらに次の歌へと続く。

極楽の道はひとすじ君ともに弥陀をぞ添えて四十八人。

切腹した四十六人と、先に切腹した主君と、阿弥陀様との四十八人で極楽への道を旅するのだと、遠足にで



も行くような歌だ。

特攻隊にしても、討入りにしても、とりわけ「残酷で、劇的な非日常」である。特攻隊員の死は、国家によって、自爆攻撃を命じられた若者たちが、肉片をバラバラにして自爆死する、残酷な死である。しかも犬死である。討入りは、忍耐と思慮を欠いて、場所柄をわきまえず狂乱して、自害を命じられて死んだ愚君の復讐を、年月をかけて準備し、ついに愚君をいじめた憎き老人の生首刎ねて怨念を晴したという、どろどろの復讐劇である。その集団の死は、自分の腹を切り裂いて死ぬことを命じられた、残酷きまりない強制自殺である。

しかしそのどちらからも、残酷きまりない、劇的な非日常性は、きれいに消され、はかなく散ること、この世の楽しみの連続性だけが、イメージされる。後世の美化ではなく、当時者がそのようにイメージしていたのだ。

かつて西ドイツの大統領ヴァイツゼッカーが、第二次世界大戦後の国のあり方を「ドイツ人は断絶において、日本人は連続において、捕えようとした」と述べたことがあった。ドイツ人は、敗戦と復興を、死と復活、審判と再生として、断絶を媒介して受取り直したのに対して、日本人は、戦前と戦後の様変わりも、一つの衣替えのように考えた。だから、ほとぼりが冷めると

岸信介など戦時中の指導者が、続々と政界復帰し、相変わらず、戦後日本の指導者として君臨し、国民の多数はそれをよしとした。

日本文化の死生観における「連続性」のイメージに対して、聖書の死生観はやはり挑戦的である。「罪の報酬は死である」とする聖書の死の理解は、むしろ

死の「残酷で劇的な死の日常性」を直視することを求める。死と共に、すべての人が受けなければならないのは、人生の会計簿を提出することである。人は死において、おのれの罪を明らかにされ、審判を受ける。地獄への道もある。けれども、その死の門を通過こそ、赦しと復活が与えられ、この世とは質的に違う、新しい命が与えられる。復讐を遂げて、「あら楽し」「極楽の道はひとすじ」とはいかないのだ。

死は残酷なものであり、恐ろしいものだ。だからこそ、すべての恐ろしい結果を引受けて下さったお方によって、復活の命が与えられることの喜びも大きいのだ。(重富)

## <アドヴェントの奇習>

私の住まいの近くにある「白い恋人パーク」では11月半ばに早々とクリスマス・ツリーにランプが点灯されて、園内の木々に一斉に光の花が咲いた。

教会暦ではまだ「アドヴェント」(待降節)に入っていないのに、巷ではすでにクリスマス・ムードである。アドヴェントは「到来」「来臨」を意味するラテン語のadventusに由来する教会用語で、主イエス・キリストの降誕(受肉来臨)を心静かに待つ準備の期間であり、元来は、復活祭前の40日の精進齋の「四旬節」をモデルとした齋戒期であった。

東方正教会では今日にいたるまでこの40日の齋戒期(11月15日から12月24日まで)を守っている。カトリック

教会では11月30日の「聖アンデレの日」をアドヴェントの開始日と定め、プロテスタントの教会暦でもこの日に最も近い主日から4週間の待降節に入る。

十二使徒の一人聖アンデレはペテロの弟で、最初にキリストに従った弟子。伝説によれば、ロシアやバルカンにキリスト教を布教した使徒と言われ、特にスラヴ人のあいだでは重要な聖人として崇拜されている。アンデレという名の語源はギリシャ語で「男らしい」を意味するandreiosであることもあって、聖アンデレは男性原理を象徴する聖人と考えられ、カトリック圏では結婚の守護聖人として未婚女性によって崇拜され、バルカンの東方正教会圏のスラヴ人のあいだ

では、奇妙なことに、熊・狼の守護者として信じられた。カトリック文化圏のポーランドでは聖アンデレの日の前夜は、「アンジュエイキ」とよばれ、娘たちが結婚の守護者聖アンデレに願をかけて結婚占いをするパーティーを開く。34年も昔のことになるが、私と妻はポーランドにいて「アンジュエイキ」のパーティーに招かれたことがある。18名の学生が集まったが、そのうち男子は3名だった。女子学生たちはさっそく占いを始めた。まず溶かした蠟をバケツの水の中に鍵の取っ手の飾りの孔を通して落としした。蠟は水の中でいろいろな形に

他いろいろな遊びをしたあとで、最後に、娘たちが履いていた靴の片方を脱いで行列をつくり、靴の先を前向きにして部屋のドアに向かって順送りに繰り返して並べていく。一番先にドアの外に出た靴の持ち主は、来年結婚できる。最後になった靴の持ち主は「スタラ・パンカ」(「老嬢」)となる。

真っ先に外に出た靴の持ち主は大喜びをしたが、最後になって「出遅れた」靴の持ち主の娘が、「スタラ・パンカ!」とからかわれて泣きだした。慰めようもなかった。バルカンのブルガリアの西部とセルビアの東部の伝説では、聖アンデレは熊を飼い馴らし

て、熊に乗って移動する。その地方では「聖アンデレの日」を「熊の日」とよぶ。熊は冬眠に入る前に人里に現われる。聖アンデレは人間、家畜、畑を熊の害から護る。ブルガリアではこの日、家の主婦は、「ト

ウキビ」(あえて北海語を用いる)をゆで、ゆであがったトウキビを「ほら、熊さん、ゆでキビだよ、おまえが生トウキビを食わないように、人や家畜を食わないように」と唱えながらかまどの煙突の中に投げ入れる。セルビアでは聖アンデレの日の前夜、主婦が3本のトウキビを果樹の上か家の外に「熊の夕食」として置く。翌朝、トウキビがかじられていると、「熊さんがやってきて、食べた」と言って、それを家の中に入れる。そのあとで家の者たちが、熊のように健康になるためにトウキビの粒を少しずつもらう。朝食前に家族の全員が「ほら熊さん、トウキビだよ」と言って、部屋の四方の隅にトウキビの粒を撒く地方もある。

## ヨーロッパの民衆文化とキリスト キリスト教の中の民間信仰

(14) 栗原 成郎



聖アンデレ(ラトゥール)

なった。それが何に似ているかによって未来を占った。二枚の皿を裏返しにして皿の間に指輪を入れたものと、何も入れなかったものとを幾組か作り、指輪が入った皿を引き当てた人は近々結婚できる、と占った。その

日本福音ルーテル札幌教会 牧師 重富克彦 岡田 薫  
札幌教会 URL <http://www.jelc.or.jp/sapporo>  
札幌礼拝堂 064-0912 中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516  
札幌北礼拝堂 001-0031 北区北31条西4丁目1-5 011-726-3243  
新札幌礼拝堂 004-0053 厚別区厚別中央3条6-1-5 011-891-5246

めばえ幼稚園

園児募集中!